

博士論文要旨

氏名 恒川 丹

題目 チーム保育における保育者の役割に関する研究

【本研究の目的】

本研究のテーマであるチーム保育は、1つのクラスを2人以上の保育者（非常勤職員を含む）で行う保育方法のことであり、近年多くの園でこの方法が取り入れられている。

研究Ⅰにおいて先行研究を概観した結果、3つの課題が明らかとなった。1つ目に、チーム保育実践を客観的に測定できる指標が存在しないことが明らかになった。2つ目に、保育者間でリーダーを担い合うような、役割を交代することの重要性は示されているが、実証的な研究がなされていないことが明らかになった。3つ目に、チーム保育が子ども集団の人間関係にどのように影響するか、客観的なデータを用いて明らかにした研究は見当たらなかった。本研究では、保育者が担う役割形態の違いが、チームの形成過程や子どもの人間関係の形成に影響を与えていると考え、論を進めていく。

上記の3つの課題解決のため、4つの研究を行った。

【研究Ⅱ】

研究Ⅱは、「チーム保育の実践を測定する指標の開発及び、チーム保育に影響を与える要因の分析」を行った。研究方法として、2018年2月中旬～3月に1200名の保育者に無記名式自記式質問紙調査を用い（有効回答数326枚）、チーム保育の実践を測定する尺度を開発した。この尺度は、「第1因子：コミュニケーションの充実」・「第2因子：効果的な保育実践のための連携」・「第3因子：改善に向けた振り返りの実施」の3つの下位因子で構成された。既存尺度との関連をみるなどして、妥当性や信頼性の検証を行った。

さらに、この尺度と保育者の役割との関連をみたところ、保育者の役割の交代があるチームの方が、保育者の役割が固定化しているチームよりも第2因子・第3因子で有意に高い値を示した。すなわち、保育者の役割形態の違いである、役割の交代の有無がチーム保育の実践に影響を与えていることが明らかとなった。

【研究Ⅲ】

研究Ⅲは、「保育者へのインタビューから捉えるチームの形成過程の検討」を行った。研究方法は、2017年4月～2018年3月の1年間、12名の保育者（3歳児クラスの保育士と幼稚園教諭）に約30分間のインタビューを行い、4つの時期に分けた逐語記録をKJ法を用いて分析を行った。また、上記のように保育者の役割交代の有無に焦点を当て、役割の交代あり群と役割の固定化群を独立変数として分析を行った。その結果、役割の交代あり群は、第1・2期では「保育者チームで保育する上での負担・悩み」が多く挙げられていたが、第3・4期では負担・悩みも減少していった。これは、第2期から多く挙げられている「園長やクラス外の保育者との情報共有・相談を行う」ことと、「他の保育者の成長を感じる」ことが影響していると考えられた。一方、役割の固定化群は、「保育する上での負担・悩み」が4期を通して見られ、交代あり群には見られなかった「共有する時間の不足」も見られた。

【研究Ⅳ】

研究Ⅳは、「チーム保育における保育者の役割と子どもの人間関係との関連についての検討」を行った。研究方法は、2017年4月～2018年3月の1年間、研究Ⅲと同一の保育者（同じクラスに所属する保育者がいる

ため計 10 名) に、子ども同士の関係性を測ることができるネットワーク分析を依頼した。その結果、役割の固定化は第 1~4 期にかけて子どもの相互選択数(保育者が相互に選択した子どもの人数)が徐々に増えていた。一方、役割の交代あり群は、固定化群に比べて子どもの相互選択数に大きな変化はなかった。このことは、役割が固定化している保育者は、クラス全体のまとまりが形成されていると子ども同士の人間関係を捉える傾向があることが示唆された。

【研究Ⅴ】

研究Ⅴは、「特別な支援を必要とする子ども(以下、支援児)のチーム保育に関する研究」を行った。研究方法は、2015 年 11 月~2016 年 1 月に研究Ⅲとは異なる幼稚園教諭 12 名に対して約 30 分間のインタビューを行った。支援児が含まれる子ども集団を保育する場合、担任と支援員(主に支援児の保育を行う保育者)というように、保育者の役割を固定化した保育形態がある。研究結果から保育者の役割が固定化している場合でも、保育者が様々な工夫によってより良いチーム保育の実践が可能となるという示唆を得ることができた。

【総合考察】

1 つ目に、開発された尺度を用いて保育者 1 人ひとりが考える改善点を抽出することで、保育における悩みを保育者が 1 人で抱え込まず、チーム全体で解決していくことができるような組織作りが可能となるのではないかと期待できる。

2 つ目に、保育者の役割形態として役割の交代あり群と固定化群に焦点を当てたことで、役割形態の違いと子ども同士の関係性との関連を捉えることが出来た。このことから、保育者の関わり方の違いが子どもの人間関係の形成に影響しているという示唆を得ることができた。

3 つ目に、支援児へのチーム保育を検討することで、保育者の役割が固定化しているチームにおける改善点を検討することができた。すなわち、保育者間で連携方法を工夫することで、共有時間の不足等の困難さを克服できる方策が明らかとなった。

博士論文審査結果要旨

学位申請者:恒川丹

論文題目: チーム保育における保育者の役割に関する研究

近年、わが国の幼児教育・保育の領域では、1つのクラスを2人以上の保育者（非常勤職員を含む）で保育するチーム保育が多く園で取り入れられている。しかし、チーム保育をテーマとした学術的な研究はこれまでほとんどなされていない。本研究はチーム保育における保育者の役割及びチームとしての形成過程、さらにはチーム保育の実践を測定する指標の開発、チーム保育が子どもの人間関係に与える影響といった、チーム保育の構造的あるいは実践的な課題をテーマとした本研究は非常に新規性のある研究といえる。

研究Ⅰでは先行研究を概観し、チーム保育実践を客観的に測定できる指標が存在しないこと、保育者の役割について実証的な研究がなされていないこと、チーム保育と子ども同士の間関係の形成との関連に関して客観的な研究が見当たらないことを明らかにした。

研究Ⅱでは、チーム保育を測定する指標を開発するため、2018年2月中旬～3月に行ったを対象とした質問紙調査（有効回答数326名）を行った。既存尺度との関連をみるなどして、妥当性や信頼性の検証を行い、チーム保育の実践を測定する尺度を開発した。また、保育者の役割形態の違いに着目すると、役割の交代の有無がチーム保育の実践に影響を与えていることが明らかにした。

研究Ⅲは、チームの形成過程の検討を行った。2017年4月～2018年3月、12名の保育者（3歳児クラスの保育士と幼稚園教諭）を対象としてインタビューを行い、保育者の役割交代あり群と役割の固定化群を独立変数として分析を行った。その結果、役割の交代あり群は、保育する上での負担・悩みが徐々に減少するが、役割の固定化群は、1年間を通して見られることを明らかにした。

研究Ⅳは、子どもの人間関係との関連についての検討を行った。対象者、期間は研究Ⅲと同一。子ども同士の関係性を測ることができるネットワーク分析を行った結果、役割の固定化は第1～4期にかけて子どもの相互選択数（保育者が相互に選択した子どもの人数）が徐々に増える一方、役割の交代あり群は、固定化群に比べて子どもの相互選択数に大きな変化はなかった。

研究Ⅴは、特別な支援を必要とする子ども（以下、支援児）のチーム保育に関する研究を行った。研究方法は、2015年11月～2016年1月に幼稚園教諭12名に対してインタビューを行った。支援児が含まれる保育では保育者の役割を固定化した保育形態が一般的となる。研究結果から保育者の役割が固定化している場合でも、保育者が様々な工夫によってより良いチーム保育の実践が可能となるという示唆を得ることができた。

総括的考察では、保育者の役割形態の違いが、チームの形成過程及び子ども同士の間関係に影響を与えることを考察した。また、支援児へのチーム保育を検討することで、保育者の役割が固定化しているチームにおける改善点を提案することができた。

本研究の結果は、今後わが国のより良いチーム保育の構築に寄与することが期待されることから、審査員一同は、博士（学術）の学位論文として価値のあるものと認めた。

作成: 家政学部児童学科教授 小原敏郎

2019年4月9日